

# 苑囿：帝国の叙事空間

## —漢賦でのアイデンティティと多声性—

鄭 在書

梨花女子大学校中文科

詩人の心は世界を包み、人間と物事を遍く察する。

(賦家之心、苞括宇宙、総覧人物)

—司馬相如

### I 序言

中国は各王朝ごとに代表的な文学様式がある。周知の通り、漢賦・唐詩・宋詞・元曲などは、各時代の物質基礎と意識形態の文学的総和として、中国の文学史叙述の骨幹になってきた。特に漢賦は、中国文学史上初めて表れる制度文学だが、その背景には強力な儒教の家父長的な権威と、大一統の理念を標榜した漢帝国の出現があった。後で再び述べるが、中国史全体を縦観した時、漢帝国の成立は‘中国的’というアイデンティティ確立の次元において、政治・文化的に画期的な意義を持つ。従って、我々はこの時期に出現した漢賦が持つ意味に注目すべきである。しかし、従来の文学研究者の漢賦に対する接近は、それなりの成果はあるものの、物足りない部分が残る。先ず、唐詩・宋詞などのジャンルに比べ、漢賦に対する関心が少なかったのではないと思われる。これは制度圏の文学である漢賦に対して、我々がイデオロギーの偏見を持つことに起因する。漢賦に対して言われる‘御用文学’・‘宮廷文学’などの修飾語は、今までの文学研究において漢賦がどのように扱われてきたかを物語ってくれる。漢賦は近代以降の写実主義的、階級主義的な観点によって規定されてきた。つまり、支配階層の享楽欲求を満たす、内容的に現実意義を持たず形式にばかりこだわるジャンルだとするのが、中国文学史での通常の記述であった。従って従来の漢賦に対する研究は、そこに内在する多層的な意味を読み解くよりも、形式や技巧などを論じる方向に傾いていたのが実状である<sup>1</sup>。

本稿では、漢賦を単純な文学のテキストとするよりも、漢帝国の物質的基礎と意識形態を含む、高度の象徴的複合体であるという観点から、読み解こうとする。伝統的に中国において文学は、特定な場合を除き決して他の学問と分離して論じられることはない。漢代の場合は特に政教との関係が密接だったため、漢賦を漢代文化の総体的な反映物として認識する必要があると思われる。本稿ではこの様な立場に基づいて、漢帝国の政治・文化的アイデンティティの確

1 この様な傾向から脱した最近の注目すべき研究として、鄭毓瑜、「賦体中‘遊観’の形態及其所展現の時空意識—以天子遊獵賦・思玄賦・西征賦爲主的討論」『第三屆國際辭賦學學術研討會論文集（上）』（1996.12）、林凌潮、「不朽与統一：漢賦与大一統權力詩学」（1・2）『文明探索』（1997.10、1998.1）等の論文を挙げられる。戸倉英美の『詩人たちの時空：漢賦から唐詩へ』（東京：平凡社、1988）にも、漢賦における空間意識と世界観について考察されている。

立という歴史上の事案と、賦作という著作行為との密接な関連性に注目しようとする。

漢賦は形式の上では韻文の体裁を構えているが、制作意図から見ると帝国の叙事である。ラカン (Jacque Lacan) は、一人の個人が主客未分の想像界を離れて主体を形成し、象徴界に安着する過程で決定的に要求されるのが言語だと言う。これと同じく、ある国家が政治・文化的アイデンティティを確立し、制度化する過程において、叙事は必須的なものである。例えば、アンダーソン (Benedict Anderson) は、近代民族国家の成立を、小説・新聞など叙事物により造られた‘同時性’という概念と深い関連があるものと見ている<sup>2</sup>。同時性は、自己同一性、即ちアイデンティティを産む。このように見ると、漢賦は確かに帝国の言葉であり叙事なのである<sup>3</sup>。このような認識は、漢賦を‘御用文学’と見なした既存の観点とあまり変わらないと思えるかも知れない。しかし本稿では既存の論究とは違って、漢賦を御用文人らが帝国に対して捧げた頌歌として見る消極的な観点ではなく、国家がアイデンティティを確立する過程で重要な機能を果たした叙事として見る、積極的な立場に立っている。

このような観点から漢賦を考察するにあたって、苑囿という皇帝の遊獵空間を舞台にして帝国の叙事を展開する司馬相如 (B.C.179-B.C.117) の「子虚賦」と「上林賦」を分析の対象にした。司馬相如を選んだ理由は、彼が武帝期という帝国の頂点期を生き、誰よりも帝国を叙事的に具現しようとした人物だからである。皇帝の遊獵所である苑囿という空間が持つ政治、文化的な意味は多大である。そこは帝国の縮小版であり、アイデンティティへと向かう帝国のあらゆる欲望が再現される場所である。本稿では、苑囿空間で繰り上げられる帝国の壮麗な表象を明らかにする。また、漢帝国は表面上は儒教の理念を中心に、言説の想像的共同体 (imagined community) を成しているが、その裏面では絶え間なく拮抗する周辺の力が存在した。したがって、苑囿が決して帝国の単元神話 (mono myth) を保証しない、相互テクスト性 (intertextuality) の原理が生きて動く空間であるということも明らかにしたい。

## II 悲劇の誕生、そして‘中国的’なものへの道

文帝十二年 (B.C.168)、梁懷王の太傅賈誼は一年前に落馬事故で死んだ主君に対する罪責感と煩悶に悩まされた挙げ句、死に至る。それから半世紀後の武帝元狩元年 (BC122)、淮南王劉安が叛逆を図るが失敗し、自殺する。

賈誼 (BC201-BC169) と劉安 (BC?-BC122)、この二人の死が我々に妙な響きを与えるのはなぜだろうか。二人の死は、普通の死ではない、悲劇的な死であるという点で類似している。しかし、この両者の悲劇が誕生する背景は、全く異なっている。これから我々はこの二つの悲

2 Benedict Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism* (London: Verso, 1993), pp.22-36.

3 古代中国における著作行為と権力の関連性を論議したものとして、Mark Edward Lewisの *Writing and Authority in Early China* (Albany: State University of New York Press, 1999) を挙げられる。ルイスは戦国時代と漢代を中心に、著作行為が政治・宗教・学問など各方面において、権力の装置としてどのように機能したかを探求する。本稿の問題意識とは多少異なるが、新しい角度から古代中国の著作行為の問題に接近した労作と言える。

劇の原因を探るための旅に出ることにしよう。

上古時代の中国社会、その文化的状況について、エバハルド（Wolfram Eberhard）は曾て次のように述べたことがある。

上古中国の社会や文化は、ある特定種族の産物ではなく、私が原始社会（primitive societies）と呼ぶ多様な社会が混合された結果である。このような仮定は、古代のある時期に‘中国社会（Chinese society）’とか‘中国文化（Chinese culture）’というものはなかったのであり、ただ‘原始的（primitive）’社会のみが存在していたという事実を含んでいる。ある時点に至って、我々が仮りに‘高級中国文化（high-Chinese culture）’と呼ぶものが現れるが、それは支配階層が自らを特別な文化を持つ特別な社会構成員であると感じていた社会、すなわち私たちが‘中国的（Chinese）’と呼ぶ社会形態であった<sup>4</sup>。

エバハルドのこのような仮説は、中国文明が上古時代から今日に至るまで自己同一性を保ちながら発展してきたという従来の通説、つまり‘黄河文明説’を否定するものであった。彼は上古時代の中国は、多数の‘地域文化（Local culture）’の相互構成体であったと仮定した。発表当時は衝撃的だったものの、以後大陸各地で考古学的発掘が進められた結果、このような内容はほぼ事実であることが明らかになった。中国の初期文化は黄河流域を中心に興ったのではなく、遼寧・長江流域など多くの邊境地域で発生した文化が共存していたのだという多元文明論は、今では定論となっている<sup>5</sup>。

このような多元的文明の情勢は、以後かなり長い期間持続される。しかし、相異なる地域文化の離合集散は、次第に一つの中心的な政治・文化形態、すなわち‘中国的’なものを指向するようになる。この形態の古代国家として現れたのが商と周であった。但し商は、地域的に限られていたし、母権制や巫術など原始社会の遺風が強かった。今日我々が考える‘中国的’なものへの確かな移行は、宗法制度が確立された周代からである。

しかし周の政治形態も、地域文化を連合した緩慢な封建制であり、強力な文化的求心力を発揮することは難しかった。結局、周代から始まった‘中国的’なものへの移行、この歴史的な動きは漢代に至って一旦終止符を打つ。漢の文化が有する特別な位置について、金翰奎は次のように述べている。

中国的世界秩序の本質をより正確に理解するためには、その発生論的検討が先ず行われるべきである。筆者は、特に漢代の世界秩序を理解することが、中国的世界秩序の本質を理解するために欠かせない過程であると信じる。なぜならば、中国的

4 Wolfram Eberhard, *The Local Cultures of South and East China* (Leiden: E.J.Brill, 1968) p.13.

5 凌純聲の中国文化多元論、蘇秉琦の区系類型論、張光直の脱中国史中心論などが、考古学・人類学の研究成果に基づき、このような立場を支持する見解である。これらについての概略的な論議は、張光直、『中国古代史的世界舞台』『歴史』（臺北：1988）第10期参照。

文化の諸様式が漢代に至ってその基本的な形態を整えたように、中国的世界秩序の基本的模型もやはり漢代に形成されたと考えられるからである。完成された中国的世界秩序の中に見られる主な要素がすでに漢代のそれに含まれているだけでなく、構造的な枠組みも漢代にほぼ整えられた。従って、中国的世界秩序の原型を漢代の世界秩序のなかで確かめ、その構造的な性格を正確に把握することは、中国的世界秩序の本質を理解する上で、省くことの出来ない過程なのである<sup>6</sup>。

中国の文化的アイデンティティ、すなわち今日我々がもっとも核心的な中国文化として認めるその内容が定型化されたのは、漢代であった。では、文化的アイデンティティと表裏をなす政治的アイデンティティは、どのように確立されたのであろうか。

春秋、戦国時代には、鉄器など生産道具と技術の発達に伴って農業生産力が増大し、社会、経済面において大きな変革が起こり始めた。まず、集団労働から個人労働へと生産体制が変わり、これによって社会単位も周代の大規模な血縁中心の宗族から、夫婦中心の家族へと変貌する。このような変貌は、戦国末、商鞅の変法が施行された後、益々速度を増し、周代の王室・貴族階層に基盤を置いた封建制が瓦解され、君主が官僚を通じて直接統治する郡県制が強化される結果を生む<sup>7</sup>。郡県制という中央集権化の趨勢と同時に発生した注目すべき現象の一つは、家と国を類比する厳格な家父長制が確立されたことである。すなわち、家は国家形成の基本単位であって、家父に対する孝は、国君に対する忠に帰結される。君主にすべての権力が集結する位階的・求心的な家父長の論理は、漢代に至って国教として採択された儒教によって完全に正当化され、拡充される。その後、二千余年の間、中国人の意識を支配し、いわゆる超安定構造の実体とも称された儒教文化は、前述した歴史的条件下で漢代に成立したのである。要約すると、各々独立した地域文化が集約された上古大陸の多元的な政治・文化的状況は、周代から中心化の道を歩み始め、漢代に至って遂に‘中国的’というアイデンティティを確保することになる。このアイデンティティは、儒教理念によってその内的論理を備え、国内においては強力な家父長的君権を、また対外的には華夷論的世界意識を誇示するようになる。

これまでの論議から、賈誼と劉安、この二人の人物の悲劇がどこから起因したのか、わかっていただけだと思う。漢初から武帝までの期間は、アイデンティティへの最後の道筋であった。中心主義を志向する皇帝側近の文学之士と、これに抵抗する諸侯・世族の間の葛藤と闘争が熾烈に展開された時期であった。ところが、漢初には周代以来の封建制の遺風である分権意識が

6 金翰奎、『古代中国的世界秩序研究』（ソウル：一潮閣、1982）p.1。エバハルドにも類似した趣旨の言及がある。Wolfram Eberhard, 上記の本、p.17: “We assume that each culture consists of a ‘hard-core’ of traits which are somehow essential and resist change and other traits which are not essential and can easily change. Considering the ‘hard-core’ traits, we can identify the ‘Chinese’ culture of the Han time, for example, as a culture that has continued up to the present.”

7 尹乃鉉、『中国史』I（ソウル：民音社、1991）pp.126-127。ルイスは周代の貴族家系によって祭儀的に独占されていた軍事行為が、戦国時代に一般農民にまで軍役が拡大することによってすべての人々が合法的暴力に参加するようになったと言う。国家権力はこれを組織支配することに関与し、これによって貴族家系は没落し、田税と軍役を提供する小農家庭が普遍化されたと主張する。Mark Edward Lewis, *Sanctioned Violence in Early China* (Albany: State University of New York Press, 1990) p.53.



未だ強く残っていた。儒臣として中央集権を擁護する賈誼は、地域諸侯たちの勢力を弱体化させようとして、‘分封策’などの改革施策を建議し、これによって勳旧勢力から恨みを買ひ、長沙王の太傅に左遷されて憂鬱な日々を送る。以後、再び梁懷王の太傅に転任されるが、在職中に不幸な最期を迎えるのである。彼が梁懷王の死に対して自責の念に駆られ、後を追って死ぬという場面に至って、我々は彼がどれほど制度と理念に誠実な人物であったかを実感する。実に彼は帝国の秩序に殉死した人物であった<sup>8</sup>。

賈誼とは違って、淮南王の劉安の活動した武帝の治世には、諸侯・世族たちの権力は著しく弱体化し、政治・文化が集中され、漢帝国のアイデンティティが確立される時期であった。このような時期に、大一統を追求する帝国の核心勢力にとって、諸侯であり地域文化の中心人物でもあった劉安は障害でしかなかった。彼は武帝の百越征伐を反対するなど、中央権力との不和のあげく、反逆罪で起訴されて自決に追い込まれる。

二人の死を思い合わせると、漢帝国がアイデンティティを確立していく途上で、二人とも時を得ずして悲劇的に生を終えたという共通点を持つ。しかしその‘時’の事情は奇妙にも相反している。儒臣であった賈誼は、道家の支配のもとで周辺の力が強かった漢の初め、あまりにも早い時期に中心主義を標榜した。それに比べ道家であり諸侯であった劉安は、儒家の支配のもとで中央集権が行われていた武帝の時期に、あまりに遅くまで地域主義を固守したことが、悲劇を産んだ動機となったのである。

以上、漢帝国が‘中国的’という政治、文化的アイデンティティを獲得するまでの長い歴史的過程を概略的に見てきた。同時に、漢代の文学を代表する賦という様式が、この歴史的過程とどのように絡み合いながら変遷し、漢代に至って帝国の叙事として機能するようになったのかを考える必要がある。周知のように、漢賦は戦国時代の楚辭に由来し、楚辭の淵源は楚の土着巫歌にある。したがって漢賦の根は、周辺部であった楚地域の巫術文化なのである。楚地の民間巫歌は、屈原などの知識階層によって採用され、楚辭という洗練された文学形式となる。そして再び宋玉や荀卿などによる過渡的な形式を経て、漢初の賦型へと進入する。この過程で荀卿は初めて‘賦’という名称を使用している。文学と権力・イデオロギーとの緊密な結合を強調した荀卿によって賦の命名が行われたということは、賦の以後の行路を予示するようである。

漢初の賦には依然として巫術文化の痕跡が残っていた。枚乗の「七發」に盛り込まれている治病儀礼的成分がそれである<sup>9</sup>。特に、形式的な側面においては問答式・羅列式など、巫歌の叙事方式が後代の定型化された漢賦にまで温存している。しかし、周辺部の巫系血統の文学であるにもかかわらず、武帝期になると司馬相如など大作家たちの創作によって、帝国のアイデンティティを遺憾なく表現する完璧な美学的構造物に生まれ変わる。この変身をどのように説

8 賈誼のこのような政治的性向については、金學主、『漢代詩研究』（ソウル、光文出版社、1974）pp.53-55参照。

9 「七發」は、呉客が病にかかった楚の太子を訪問することから始まり、呉客が美辭麗句を並べながら様々な道理を聞かせると、太子は汗を出し病が治るという話で終結される。『六臣註文選』卷三四「七發」：“楚太子有疾、而呉客往問之曰、伏聞太子玉體不安、亦少聞乎…客曰、今太子之病、可無藥石針刺灸療而已。可以要言妙道說而去也。…於置太子據几而起曰、渙乎若一、聽聖人辯士之言、漉然汗出、霍然病己。”

明するべきか。ここには審美化によって他者性を消し弱め、馴致させる帝国文化の作用機制が潜んでいる。まるでカリブ海の原住民たちの疲れ果てた生を代弁していた哀傷的な情調のレゲ（Reggae）音楽が、第一世界の音楽家たちによって磨かれた後、明るく快活な曲調に生まれ変わって流行ったように、巫歌・楚辭は賦家たちの手で加工され、地域文化としてのアイデンティティを全て喪失して帝国の頌歌となった。

この過程で主導的な役割をした司馬相如は、果たしてどんな人物だったのだろうか。彼は漢帝国の覇権主義を積極的に実践した人物であり、周辺民族の西南夷を服属させるのにも大きく寄与した<sup>10</sup>。「喻巴蜀檄」・「難蜀父老」などは、このことと関連した文章で、彼の濃厚な帝国意識が表現されている。彼は「封禪文」を遺書として残すほど、徹底した皇権の崇拝者でもあった。「詩人の心は世界を包括し、人間と物事を遍く察する（賦家之心、苞括宇宙、總覽人物。）」<sup>11</sup>という彼の有名な言葉は、文学的な心霊の側面から読むこともできるが、支配の叙事として賦を把握する彼の認識の一端を見せてもいる。したがって、ここで分析の対象とする彼の「子虚賦」及び「上林賦」は、帝国の叙事物の標準と見なしていいだろう。「子虚賦」は諸侯の遊獵を描写している。しかし、「上林賦」とは内容的にも繋がっており、類似した叙述構造を持つので、所謂「天子遊獵賦」という名目の下に一つの作品として見なされることもある<sup>12</sup>。言い換えれば「子虚賦」は諸侯の見地から書かれたとは言え、あくまでも帝国作家である司馬相如の意図的な産物であるため、当時の地方政権の立場を表明した作品として読むことはできないのである。これは帝国の欲望の縮小複写版にすぎない。したがって、司馬相如の帝国意識に関して「上林賦」と一緒に論じてもし支えないと判断し、分析対象に加えたことを附言しておく。

### III 苑囿の帝国表象

#### 1. 苑囿の本質的意味及びその変遷

帝国の叙事である漢賦が描写する様々な対象のうち、苑囿は皇帝が自ら君臨する遊獵空間であるという点で特に重要な意味を持つ。我々は苑囿で展開される帝国の表象を考察するに先立って、苑囿という空間自体が含有する本質的な意味について探索してみる必要がある。

まず、『説文解字』の「苑」と「囿」の解説を見ると、「苑は鳥類と獸類を飼うところ（苑、所以養禽獸也。）」であり、「囿は苑に垣があるところ（囿、苑有垣也。）」であるとしている。結局、苑囿は禽獸を飼う区域を意味する。苑囿についての一番古い記録は『山海經』に見える。崑崙丘の陸吾という神が、天帝の苑囿の季節を管理するという内容がそれであるが<sup>13</sup>、神話時

10 私たちは次の文で彼の濃厚な帝国意識をうかがうことができる。『史記』卷百十七「司馬相如傳」：「且詩不云乎、普天之下、莫非王土、率土之濱、莫非王臣。是以六合之内、八方之外、浸澤衍溢、懷生之物有浸潤於澤者、賢君恥之、今封疆之内、冠帶之倫、咸獲嘉祉、靡有闕遺矣、而夷狄殊俗之國、遠絕異黨之地、舟輿不通、人迹罕至、政教未可、流風猶微。…（四夷）內嚮而怨曰、蓋聞中國有至仁焉、德洋而恩普、物靡不得其所、今獨曷為遺己、舉踵思慕、若枯旱之望雨、…故北出師以討彊胡、南馳使以諄勁越、…遐邇一體、中外提福、不亦康乎。」

11 『西京雜記』

12 龔克昌は、蕭統が『文選』を編集する過程で、本来一つの作品であった「天子遊獵賦」を「子虚賦」と「上林賦」とに分割したと主張する。龔克昌、『漢賦研究』（濟南：山東文藝出版社、1990）pp.86-91参照。

13 『山海經』「西山經」：「崑崙之丘、是實惟帝之下都、神陸吾司之、…是神也、司天之九部及帝之囿時。」

代の苑囿はトーテムのような神聖な動物が遊ぶ祭儀的、宗教的空間であったのだろう。苑囿に対するこのような初期の観念は周代にまで続いている。『詩經』には祥瑞の禽獣たちであふれる周文王の靈囿を頌歌する箇所がある<sup>14</sup>。神聖な場所であった上古時代の苑囿は、その宗教的性格ゆえに宇宙を縮小した姿に造成されたと思われる<sup>15</sup>。すなわち祭壇をはじめ、山や湖、動植物などが一つの世界を成していたのである。そして秦・漢代の上林苑に至ってもその形象は維持され、南山と昆明池、宮室、そして珍奇な動植物たちが調和のなかに配置されたのである。しかし漢代の苑囿が表象する宇宙は、上古時代のように神の摂理下にある宗教的な領域ではなく、皇帝の統治下に置かれ

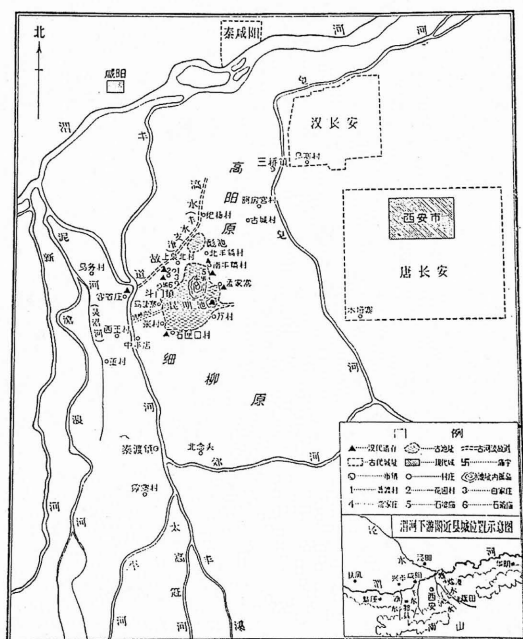


図1 上林苑の位置

た帝国の領土であった。苑囿のなかで神聖視された動物たちは、ここでは皇帝の周期的な暴力の行事といえる畋獵の対象となった。苑囿のこのような機能は、漢代以後清代まで持続される。

皇帝の遊獵場としての苑囿の存在とは別に、魏晉以後、園林という名称の私的な空間が造成されはじめる。園林とは、苑囿より規模の小さい、佛寺や道觀、書院などに属した林、または士大夫や文人、商人などの個人の宅園、別業などを指すが<sup>16</sup>、これらも山水及び建物の基本配置は宇宙的模型に依拠していた。特に個人の園林の場合は、人格の陶冶や完成を追求する空間として認識された。このように苑囿空間のイメージは、早くは天神の居所、樂園から、帝国の縮小版を経て、宇宙論的思索の場へと歴史的に変貌してきたことがわかる<sup>17</sup>。

## 2. 畋獵：捕獲と支配

苑囿空間で展開される帝国の行事で最も重要なのは、言うまでもなく皇帝の遊獵であった。それは、『文選』での賦の題材別分類において「畋獵」が独立した項目になっていることから察せられる。畋獵の場面は「子虛賦」・「上林賦」のなかでも一番力動的に描かれており、全体の叙事も畋獵を中心にして、その前後と間に苑囿の地勢・景觀・動植物相・鉱物相・宮室・皇帝の行樂などが描写されている。言い換えれば、畋獵こそが両賦の叙事の核心なのである。

14 『詩經・大雅』「靈臺」：「王在靈囿、麋鹿攸伏、麋鹿濯濯、白鳥嚳嚳。」

15 王毅、『園林與中国文化』（上海：上海人民出版社、1995）p.29.

16 李珠魯、「中国園林と中国文化」『中国文學』（韓国中国語文學會、2000.5）第53輯、p.27.

17 苑囿に内在する意味の歴史的推移については、Andrew H. Plaks, "The Chinese Literary Garden" *Archetype and Allegory in the Dream of the Red Chamber* (Princeton: Princeton University Press, 1976) pp.146-178参照。

したがって、苑囿の帝国表象を分析するに際して、畋獵という皇帝の特権的行為に注目せざるを得ない。しかしながら今までの漢賦研究では、畋獵の政治的意義はさほど評価されず、あくまでも皇帝の奢侈・娯樂の行為として解釈するに止まっている嫌いがある。まず、畋獵についての新しい見方と関連して念頭に置くべきことは、その祭儀的性格である。いち早い甲骨文では商王の畋獵に関する占トを記しており、畋獵は当時の祭儀ならびに軍事活動と密接な関わりを持っていた<sup>18</sup>。『文選』では「子虚賦」に入る前に、畋獵について次のように説明している。

鄭玄の『禮記』注では、畋獵とは祭祀の料理に入用なものを供給することであると言う。「王制」篇では、天子と諸侯は通常一年に三回畋獵を行うと言う。馬融は、畋獵とは獸を捕らえることであり、‘田’は‘畋’であると言う。

（鄭玄禮記注曰、田者所以供祭祀庖厨之用。王制云、天子諸侯無事則歲三田。馬融曰、取獸、田畋。）

これは畋獵が単なる遊戯的な狩りではなく祭儀に関わる行事であり、毎年三回周期的に行われていたことを示している。なお、「子虚賦」のなかの句、‘割いた生の肉が車輪を染める（割鮮染輪）’の注で呂向は、‘鮮’を祭祀用の供え物と見なし、その血が車輪を染めているものとしている<sup>19</sup>。つまり、この句は祭祀用のいけにえが車にいっぱい載せてあるのを描いたものである。ここで我々は祭儀的性格を帯びた畋獵行事の根本的な意味合いについて考えてみる必要がある。

祭儀は神話と表裏の関係をなし、神話的瞬間を象徴的に再現する規範化された儀式である。だとすれば、畋獵は神話のどのような内容を保証するための行為であったのか。果たしてその神話的起源は何なのだろうか。ルイス（Mark Edward Lewis）は黄帝と蚩尤との間の戦争神話が、後代の支配者たちに‘認可された暴力（sanctioned violence）’のモデルを提供していると主張する<sup>20</sup>。畋獵を‘認可された暴力’と見なすとき、ルイスの仮説にかなりの説得力があることに気付くだろう。中原の守護者であった黄帝は、激戦の末に獸の姿をした邊



図2 高句麗 舞踊塚壁画の狩獵図

18 陳偉湛、『甲骨文獵刻辭研究』（南寧：廣西教育出版社、1995）p.1.24.27.

19 『六臣註文選』卷七「子虚賦」：「向曰、…鮮牲也。謂割牲之血、染於車輪。」

20 Mark Edward Lewis, *Sanctioned Violence in Early China* (Albany: State University of New York Press, 1990) pp.165-212参照。

防の挑戦者蚩尤を制圧し、文明と平和をもたらした。後代の支配者たちは、畋獵という祭儀行事を通じてこの戦いを周期的に繰り返すことで、次のような二つの劇的な効果を上げることになる。一つ、畋獵の主宰者である帝王は黄帝と同一視され、権力の正統性を賦与される。二つ、苑囿空間の動物は蚩尤と見なされ、これを追いかける畋獵活動は軍事訓練と同様の意味合いを持つ。「子虚賦」や「上林賦」の狩獵の場面は、実際の戦闘を彷彿させるほど生々しく描写されている。獲物を追いかけて、矢を放ち、挑んで激闘する場面、そして列兵する場面などは、そのまま軍事訓練に相応している。例えば、次のような描写である。

矢はただ傷を与えることに止まらず、首筋を断ち、頭に突き刺さる。矢は必ず命中し、矢を放つ音と同時に獲物を倒してしまう。やがて天子の車は速さを抑えながら行きつ戻りつ陣営を回り、軍隊の進退を観察し、將軍と兵士たちの動きを見回す。その後だんだん速く走りだし、たちまち遠くに駆け去る。小鳥たちをけちらし、敏捷な野獣を踏み倒す。白鹿を轢殺し、すばやい兎を捕らえてしまう。その敏捷さは、あたかも稲妻を追いつき、車越に光を残すごときもの。獸たちを追いかけて、天地を超える。夏后氏の蕃弱の弓に白い羽で飾った矢を載せ、梟陽を射とめ、飛遽を殺す。標的を選んで矢を放ち、当てる前に的を指名する。矢が弓を離れるやいなや、的となった動物は倒れるのである。

(箭不苟害、解脰陷腦。弓不虛發、應聲而倒。於是呼、乘輿弭節徘徊、翱翔往來。睨部曲之進退、覽將帥之變態、然後浸淫促節、儻復遠去。流離輕禽、蹴履狡獸、轉白鹿、捷狡兔。軼赤電、遺光耀。追怪物、出宇宙。彎蕃弱、滿白羽、射遊梟、櫟飛遽。擇肉而後發、先中而命處。弦矢分、藝殪仆。)<sup>21</sup>

速やかな用兵の強調、正確な射法の説明などは、畋獵の目的が単なる動物の捕獲に止まるものではない印象を与える。ひいて言うなら、ここに見える動物には帝国の覇権を阻害する周辺蛮夷のイメージが重なっている。それは、黄帝が敗北させた蚩尤の形象にすでに予示されていたのである。蚩尤は獸であると同時に人間でもある、邊防の種族であった。すなわち、畋獵とは動物を狩ることと、帝国の覇権を確保することが重なった行為であったと言えよう。帝王の畋獵は、黄帝の神話的偉業を継承し、華夏文化の最初の担当者となった周代においてすでに制度化されている。その畋獵行為の二重的意味が極大化されるのは、周の正統を継承することを自任した国、つまり歴史的にはじめて‘中国的’なものを具現した漢帝国に至ってのことであった。では、次に「子虚賦」の終わりの部分を読み、畋獵の隠された意味をもう一度考えてみたい。

秋には青丘で狩をし、海の外で遊ぶ。

(秋田乎青丘、彷徨乎海外)

21 『六臣註文選』巻八「上林賦」

前述したように、「子虚賦」はもともと司馬相如が諸侯である梁孝王のために作ったものであるが、漢武帝がその作者について、「同じ時代に生まれられなかったことが嘆かわしい（恨不同世）」と、心境を披露したほどであるから<sup>22</sup>、事実上、司馬相如の帝国意識が発揮されたものと見なすべきである。作者である司馬相如が死んで間もない頃（B.C.108）、なるほど武帝は青丘の国、古朝鮮を攻撃し、楽浪・真番・臨屯・玄菟など、四郡を設置している。やがて、青丘での畋獵と海外での彷徨という「子虚賦」の夢が実現されたのである<sup>23</sup>。

### 3. 博物館：展示と服属

帝国は博物館を愛好する。イギリスの大英博物館やフランスのルーブル博物館（the Louvre）など、巨大な威容を誇る博物館は、帝国主義が盛行していた時期に、今日のような姿を整えられた。世界中の遺物たちは、それぞれの故郷を離れて帝国の博物館のガラス棺の中に眠っている。アドルノ（Theodor W. Adorno）が博物館（museum）と墓（mausoleum）の関連性を指摘したのは、まことに卓越な洞察と言えよう。

「子虚賦」や「上林賦」では、漢帝国が支配する物質世界の範疇を誇示するため、「堆砌」の方法によって動・植・鉱物など、世界のあらゆる事物を羅列している。所謂「資産空間的展示」<sup>24</sup>である。例えば、次の句をみよう。

上林苑の南部では、真冬でも草木が生え、水が湧き出、川が波立つ。そこに住む獣は、獠・旄・貉・犛・沈牛・麋麋・赤首・圖題・窮奇・象犀などである。…また、ここには夏に熟する盧橘や黄甘・橙榛・枇杷・燃・柿・棣・柰・厚朴・棗・楊梅・櫻桃・蒲陶・隱夫・蓂・棣・荅逯・蘿支などが植えられている。

（其南則隆冬生長、涌水躍波。其獸則獠旄貉犛、沈牛麋麋、赤首圖題、窮奇象犀。…於是乎、盧橘夏熟、黄甘橙榛、枇杷燃柿、棣柰厚朴、棗楊梅、櫻桃蒲陶、隱夫蓂棣、荅逯蘿支。）<sup>25</sup>

まず、暖かい上林苑の南部に住む動物として、象・犀など南方生まれの動物を羅列している。「窮奇」は、『山海經』『海内北經』や『神異經』『西北荒經』などに見えており、実は北方異域に住む怪獣である。同じく貉もそうである。その次に、盧橘や黄甘・橙榛・枇杷など、中国各地で産出される果実の種類を羅列している。この中には、当時張騫のシルクロード開拓以来、

22 『六臣註文選』巻七「子虚賦」李善注：“漢書曰、相如遊梁、乃著子虚賦、後蜀人楊得意為狗監、侍上。上讀子虚賦曰、朕獨不得與此人同時哉。”

23 青丘とは、古来山東の一部、或いは古代の韓国を指す名称であった。しかし「上林賦」で齊王の遊獵行為を「越海而田」と言っていることから、「秋田乎青丘」の青丘は山東の境内ではなく、海外の地域と見るべきである。胡紹煥・高歩瀛なども遼東一帯、高句麗地域であったと推定している。

24 鄭毓瑜、「賦體中「遊觀」の型態及其所展現的時空意識—以天子遊獵賦・思玄賦・西征賦為主的討論」『第三屆國際辭賦學術研討會論文集（上）』（1996.12）pp.413-414. またルイスは、漢帝国に服属された遠方の国からの貢ぎ物であるこれらの事物と「賦」の辞義の暗合を指摘する。「賦」は地税の意味も持っている。Mark Edward Lewis, *Writing and Authority in Early China* (Albany: State University of New York Press, 1990) p.320参照。

25 『六臣註文選』巻八「上林賦」



西域から輸入されるようになった葡萄も含まれている。司馬相如のこのような羅列品は、まるでエリオット (T.S.Eliot) の詩の中に併置 (juxtaposition) された世界各地の事物と知識—これらはエリオットが属する西欧の支配力によって収集されたものである—のように、帝国の作家だけが特権的に享有することのできる全方位的な世界認識の所産である<sup>26</sup>。しかし、窮奇・獏・葡萄などは、南方の動物類や一般的な果実類の体系からは明らかに外れた、強い異他性 (alterity) を帯びた事物である。それにも関わらず中国の動植物体系の中に配置されるのは、帝国作家の独特な観点が介入しているからである。その観点とは、博物館学の特性と同じものである。つまり、博物館自体の異種性を拒否し、異種性を同一の体系・シリーズに縮小しようとする特性である<sup>27</sup>。博物館は、調和のとれた表象世界を形成するという仮説によって、対象を展示するのである。帝国作家の立場は、このような博物館学の展示仮説に似ていると言える。司馬相如は、中国圏外の奇異な事物をも日常的な事物の体系に編入させて異他性を除去することによって、調和のとれた帝国の世界像を顕示しようとする。「子虚賦」や「上林賦」という博物館に展示された中国、或いは中国圏外のあらゆる事物や知識は、展示されることによって漢帝国という巨大な他者に服属される。収集、分類、羅列することによって、「子虚賦」や「上林賦」は異他的存在の墓となるのだろう。

#### 4. 領土：区画と統制

アイデンティティ獲得へ向けられた帝国の欲望が最も排他的に表れる場所は、領土においてである。帝国とその周辺との葛藤は、つまるところ領土の問題なのである。帝国の領土拡張の欲望についてタイラー (Stephen A.Tyler) は、西欧の場合それは自我の探索よりも、空間の支配によって時間を克服しようとすることに起因すると言った<sup>28</sup>。しかし中国の場合は、この二つの方向が両方とも追究されたと思われる。例えば、秦始皇が不死の薬を求めて方士徐福を三神山に送ったことは、後世に流伝された徐福の日本開国説などに関連づけてみた時、やはり空間に対する支配欲を排除することは出来ないからである。

苑囿空間を帝国の領土になぞられた時、「子虚賦」や「上林賦」においてその内的空間は、大体次の三つの基準によって区画され、叙述される。先ず、地形である。先ずは山、河、平野などの自然地理的形勢によって領域を分けている。二つ目の基準は、方位である。地形を更に細かく説明する時、東西南北によって分割する。四方の概念は甲骨卜辭に顕著に表れ、その後巫歌・楚辭などでの空間叙述方法を経て、漢賦に至っている。三つ目の基準は、生態である。事実上の叙述の核心単位として、植物相 (flora)・動物相 (fauna)・鉱物相などによって空間を分別している。諸国の領土を内的に区画する認識がこのようなのであれば、対外的な領土認識はどのようなものであろうか。次の言及をみよう。

26 T.S.Eliotの作品の中に見えるこのような傾向に対する批判的論議は、Poul Douglass, "Reading the Wreckage: Decrypting Eliot's Aesthetics of Empires", *Twentieth-Century Literature* (Spring 1997) No.43, pp.1-26参照。

27 Douglas Crimp, "On the Museum's Ruins", *The Anti-Aesthetic* (Washington: Bay Press, 1983), Edited by Hal Foster, p.49.

28 Stephen A. Tyler, *The Unspeakable: Discourse, Dialogue, and Rhetoric in the Postmodern World* (The University of Wisconsin Press, 1987) p.4.

天子が諸侯に貢納を命ずるのは、財産を集めるためではなく、治めている地方の情勢を述べさせるためである。境界を定めるのは、防衛のためではなく、勝手な出入りを禁じるためである。今、齊は東の守りとして封ぜられているのに、勝手に肅慎国と通じ、国を離れて国境を越え、海を渡って狩りに行ったりする。それは諸侯の名分の上でまことに間違ったことである。

(夫使諸侯納貢者、非爲財幣、所以述職也。封疆畫界者、非爲守禦、所以禁淫也。今齊列爲東藩、而外私肅慎、捐國踰限、越海而田、其於義、固未可也。)<sup>29</sup>

諸侯国である齊が肅慎など周辺国と交流したり、辺境の外へ軍事活動を起こすなど、独立的な政治行為を見せるのを容認しない、強い中央集権的な意思が表明されている。ここでは、当時政治的アイデンティティを確立する過程にあった漢帝国の排他的な対外意識を読み取ることが出来る。

#### IV 帝国叙事の解体と再定義——結語に代えて

今まで司馬相如の「子虚賦」と「上林賦」を中心に、苑囿空間に投影された帝国の表象を考察してきた。その結果、漢帝国は政治・文化的アイデンティティを確立する過程で、畋獵という「認可された暴力」を通じて君権の正統性を強化し、周辺種族に対して軍事的威力を誇示したことがわかった。また、博物館的な記述方式について考察した時、中国やその周辺の事物と知識が帝国の学問体系に編入されて異他性を失い、大一統の世界相を示していることが明らかになった。最後に、漢帝国の領土に対する内的区画は、地形・方位・生態の基準によって行われており、また対外認識は諸侯国の独自の活動に対する強力な統制として表れていた。これは帝国の権力を集中させようとする意図によるものである。

結局、苑囿空間を通じて表出された漢帝国の政治・文化的様相は、「中国的」なものを実現しようとする欲望の構図のもとに形作られた整合的なものである。そして、その裏面には儒教イデオロギーが支配する家国一体の位階的社会が実存しているのである。しかし我々はこのような意見が直ちに修正される必要性を感じる。なぜなら、我々が苑囿の帝国表象を内の一貫性を保つ調和のとれた世界として見ようとする瞬間、脳裏に明滅する不一致と亀裂のイメージを看過することはできないからである。我々は、淮南王劉安の死について、二つの真実が存在することを知っている。その一つは反逆罪を犯し窮地に追い込まれて自殺を遂げたという官方史家の談話である。もう一つは彼が日頃心酔していた練丹の術が成功し、神仙になったという民間の伝説である<sup>30</sup>。どっちが事実かという問題はさて置き、我々はこのことから当時の官方の儒教言説だけが漢代文化の性格を決定する最終審級ではないということがわかる。「子虚賦」

29 『六臣注文選』巻八「上林賦」

30 『神仙傳』「劉安（補）」：「漢淮南王劉安、言神仙黃白之事、名爲鴻寶萬畢三卷、論變化之道。於事八公乃詣王授丹經及三十六水方。俗傳安之臨仙去、餘藥器在庭中、雞犬舐之、皆得飛升。」もちろん劉安の得説話は虚構であるが、問題はそれを信じたが人々が中国の全時期を通じて存在してきたということである。我々はこの両者を区分して扱うべきである。過去の中国学は、前者に拘って後者の実存を無視してきた。その結果、中国文化の大事な「現実」を見逃してしまったのである。

や「上林賦」の行間からも、正統的なものと異端的なもの、規範的なものと放漫なもの、中心的なものと周辺のものの間の場所換えや相互浸透の現象を、難なく確認することが出来る。畋獵の主宰者として「認可された暴力」を鼓舞していた君主が突然恬澹寡欲の冥寂士を自称したり<sup>31</sup>、帝国の中心空間である上林苑の動植物相の相当部分が辺境や異域の品種で占められていたりする。また、昆侖山・葡萄・渤海・蜚廉など西方や東方語系の外来語<sup>32</sup>も、この二つの賦に盛り込まれた文化を多声化する役割を果たしている。

何よりも興味深いのは、このような相互浸透現象が人間界と自然界、現実界と想像界の間でも度々起こっている点である。例えば、船上の歌声に魚族と水石が共に感応するという描述<sup>33</sup>とか、龍・鳳・麒麟などの瑞獣はもちろん、神話上の想像の動物たちが現実の動物の目録に並べられる現象<sup>34</sup>などがそれである。このような現象を、支配権力が異域や自然界・想像界まで浸透し干渉するものとして、帝国理念の次元で解釈する余地がないわけではない。しかし、帝国の一方的で破壊的な支配関係ではなく、相互補完的な関係の次元でこの問題を思惟する時、我々は漢帝国の叙事の性格を再考すべきであると感じるようになる。つまり、既存の支配―被支配の図式では説明しきれない何かがあるのである。言うまでもなく、暴力的で一方的な支配関係を見せる近代以降の帝国主義とは異質の、相互交感・反応の文化体系が存在していたと思われる。言い換えれば、それは劉安の死にまつわる二つの真実のように、単一の総体性としては存在しないが、さまざまなテキストを一つに維持する相互テキスト性<sup>35</sup>と酷似する文化状況なのである。我々は前に漢帝国の文化について、儒教を軸とした言説の想像的共同体であると表現した。しかし、想像的共同体というものが実際には虚構であるからには、我々が今まで暫定的に合意してきた漢帝国のアイデンティティ、つまり「中国的」なものの実態について、新しく定義を下す必要があるだろう。

## 参考目録

### 1. 原典及研究書

『詩経』。

『史記』。

『六臣註文選』

『列仙伝』。

31 『六臣註文選』巻七「子虚賦」：“于是楚王乃登雲陽之臺、怕乎無為、儻乎自持。勺藥之和具、而後御之。”、巻八「上林賦」：“于是酒中樂酣、天子芒然而思、似若有失。”漢賦の中に見える神仙思想については、許東海、「賦家與仙境—論漢賦與神仙結合的主要類型及其意涵」『漢學研究』（臺北：漢學研究中心、2000.12）第18巻第2期参照。許氏は「上林賦」について描述上の仙趣を指摘している。（上掲論文p.264）

32 昆侖・葡萄は西域の言語、渤海・蜚廉はアルタイ語系統から由来したという見解が有力である。

33 『六臣註文選』巻七「子虚賦」：“振金鼓、吹鳴籥、榜人歌、聲流喝。水虫駭、波鴻沸。涌泉起、奔揚會。礪石相擊、琅琅礚礚、若雷霆之聲。聞乎數百里之外。”、巻八「上林賦」：“千人唱、萬人和。山陵爲之震動、川谷爲之蕩波。”

34 『六臣註文選』巻七「子虚賦」：“蹴蛭蛭、隣距虛、軼野馬、轉陶駘、乘遺風、射游騏。”、巻八「上林賦」：“其北則盛夏含凍裂地、涉冰揭河。其獸則麒麟角端、駒騶橐駝、蛭蛭騊駼、駃騠驢羸。”

35 Marc Eigeldinger, *Mythologie et Intertextualité* (Genève: Editions Slatkine, 1987) pp.9-12.

『西京雜記』。

鄭在書 訳註。『山海經』。漢城：民音社。1991。

——。『不死的神話和思想』。漢城：民音社。1994。

金學主。『漢代詩研究』。漢城：光文出版社。1974。

金翰奎。『古代中国の世界秩序研究』。漢城：一潮閣。1982。

尹乃鉉。『中国史(1)』。漢城：民音社。1991。

龔克昌。『漢賦研究』。濟南：山東文芸出版社。1990。

陳偉湛。『甲骨文田獵刻辭研究』。南寧：廣西教育出版社。1995。

王 毅。『園林与中国文化』。上海：上海人民出版社。1995。

王興國。『賈誼評伝』。江蘇省：南京大學出版社。1992。

中國文選學研究会 編。『文選學新論』。鄭州：中州古籍出版社。1997。

陳広忠。『劉安評伝』。南寧：廣西教育出版社。1996。

福島吉彦。『漢の武帝』。東京：集英社。1987。

戸倉英美。『詩人たちの時空：漢賦から唐詩へ』。東京：平凡社。1988。

Anderson, Benedict. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. London: Verso. 1993.

Cheyfitz, Eric. *The Poetics of Imperialism: Translation and Colonization from The Tempest Tarzan*. New York & Oxford: Oxford University Press. 1991.

Davis, Robert Con. *Lacan and Narration: The Psychoanalytic Difference in Narrative Theory*. Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press. 1983.

Dittmer, Lowell & S. Kim, Samuel. *China's Quest for National Identity*. New York: Cornell University Press. 1993.

Eberhard, Wolfram. *The Local Cultures of South and East China*. Leiden: E. J. Brill. 1968.

Eigeldinger, Marc. *Mythologie et Intertextualite*. Geneve: Editions Slatkine. 1987.

Fairbank, John King. *The Chinese World Order*. Cambridge: Harvard University Press. 1968.

Lewis, Mark Edward. *Sanctioned Violence in Early China*. Albany: State University of New York Press. 1990.

——, *Writing and Authority in Early China*. Albany: State University of New York Press. 1999.

Tyler, Stephen A. *The Unspeakable: Discourse, Dialogue, and Rhetoric in the Postmodern World*. The University of Wisconsin Press. 1987.

## 2. 研究論文

李珠魯。「中国園林和中国文化」『中国文学』。韓国中国語文学会。第33輯。2000。5。

林凌潮。「不朽与統一：漢賦与大一統權力詩学（1，2）」『文明探索』。1997.10。1998.1。

張光直。「中国古代史の世界舞台」『歴史』。台北：1988。第10期。

鄭毓瑜。「賦体中「遊觀」の型態及其所展現の時空意識—以天子遊獵賦・思玄賦・西征賦為主的討論」『第三屆國際辭賦學學術研討會論文集（上）』。1996。12。

許東海。「賦家与仙境—論漢賦与神仙結合的主要類型及其意涵」『漢学研究』。台北：漢學研究中心。2000。

12. 第18卷。第2期。

Crimp, Douglas. "On the Museum's Ruins" *The Anti-Aesthetic: Essays on Postmodern Culture*. Washington: Bay Press. 1983. Edited by Hal Foster.

Douglass, Paul. "Reading the Wreckage: De-Encrypting Eliot's Aesthetics of Empire" *Twentieth-Century Literature*. Spring. 1997.

Plaks, Andrew H. "The Chinese Literary Garden" *Archetype and Allegory in the Dream of the Red Chamber*. Princeton: Princeton University Press. 1976.

## 【Abstract】

Every dynasty of China has its own literary genre. Han *Fu* (漢賦), Tang *Shi* (唐詩), Song *Ci* (宋詞), Yuan *Qu* (元曲), each is total reflection of every dynasty, became a core part of Chinese literary history. We can say that Han *Fu* was the first institutional literature in the Chinese literary history.

There were powerful Confucius authority and the founding of Han empire in the background of Han *Fu*. Especially Han empire had deep relation with the forming of Chinese identity. At this point, we need to have a attention to Han *Fu*. Han *Fu* is not simple literary form, but high symbolic complexity including material condition and ideology of Han dynasty.

In this paper, we analyze Han *Fu* focusing on hunting activity which was performed in the garden of emperor. The texts are *Zixu-fu* (子虛賦) and *Shanglin-fu* (上林賦) written by Sima Xiangru (司馬相如). He expressed the identity of Han empire through the literary form of *Fu*.

Shanglinyuan (上林苑), the imperial garden as a hunting place of emperor has very important meaning politically and culturally. We can say this space is a miniature of Han empire. It represents all the desires toward the identity of empire. Han empire constituted the imagined community of discourses by the center of Confucius ideology. But there were many resisting marginal powers in its inner side. In this paper, we try to elucidate the fact that imperial garden is a space where the principle of intertextuality is alive.